



Short ショートコメント

★★★

軽蔑 4K レストア版

1963年／フランス映画

配給：ファインフィルムズ／104分

2023（令和5）年11月23日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data 2023-138

監督：ジャン＝リュック・ゴダール
 原作：アルベルト・モラヴィア『軽蔑』
 出演：ブリジット・バルドー／ミシェル・ピッコリ／ジャック・パランス／ジョルジア・モール／フリッツ・ラング

みどりころ

『さらば、愛の言葉よ』（14年）はジャン＝リュック・ゴダール監督の最新作だったが、ブリジット・バルドーを主演させた本作は、私が中学3年生だった1963年の作品。60年前の名作が4Kレストア版で復活したことに感謝！

『軽蔑』とは何ともきついタイトルだが、コケティッシュな魅力を振りまく女優、ブリジット・バルドーから軽蔑される男は一体誰？また、その理由は？そして、本作のストーリーの展開は？

ギリシャ神話『ユリシーズ』の映画化を巡って展開される、脚本家とその妻の葛藤を描く本作は、商業的に最も成功した作品らしいが、それでもゴダール監督作品らしく難解。あなたは本作を如何に理解し？いかに解釈？

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

◆本作は、ジャン＝リュック・ゴダールの最高傑作の1つで、唯一アメリカ系スポンサーの下で制作され、最も商業的に成功した作品らしい。その製作は1963年だから、私が中学3年生の時だ。当時、3本立て55円の日活系映画館に毎週のように通っていた私がゴダール監督の最新作を観ていなかったのは当然だ。

もっとも、『スクリーン』と『映画の友』を読んでいた私は、ブリジット・バルドーという女優の名前はよく知っていたから、本作の情報だけは知っていた。そんな本作が60年ぶりに4Kレストア版で復活したのだから、こりや必見！

◆もともと、ゴダール監督の映画は抽象的で感覚的（？）だからわかりにくい。その代表が、最新作の『さらば、愛の言葉よ』（14年）（『シネマ35』未掲載）だった。2022年5月17日に観た『勝手にしやがれ 4Kレストア版』（60年）（『シネマ51』248頁）や『気狂いピエロ 2Kレストア版』（65年）（『シネマ51』250頁）はわかりやすいし、本作もわかりやすいが、それでも難解だ。

本作は、プロデューサーをアメリカ人のジェレミー・プロコシュ（ジャック・パランス）、監督をドイツ人のフリッツ・ラング（本人）として、目下製作中の映画『オデュッセイア』

を巡る物語だが、そのストーリーはわかりにくい。本作の主人公は、ジェレミーから同作の脚本をより大衆的に（具体的には、よりエロチックに）書き直してほしいと依頼された脚本家のポール・ジャヴァル（ミシェル・ビッコリ）。しかして、本作冒頭では、お尻丸出しのヌード姿をポールに見せつける、ブリジット・バルドー扮するカミーユの姿が登場するので、それに注目！この2人はもちろん夫婦だが、そこに見る夫婦の会話は・・・？

◆ブリジット・バルドーはコケティッシュな魅力が持ち味だが、本作ではそれを十分に發揮している。対する夫のポールは、引き受けた仕事に対しても、妻のカミーユに対しても優柔不断（？）だから、ゴダール監督が『勝手にしやがれ』や『気狂いピエロ』で主演男優に起用したジャン=ポール・ベル蒙ドの魅力には到底及ばない。

カミーユに扮するブリジット・バルドーのヌード姿をたっぷり楽しんだ後、映画スタジオでポールと落ち合ったジェレミーが、そこにやってきたカミーユに一目惚れし、「自宅に来ないか」、「ロケ地のカリブ島に来ないか」とちょっかいを出すシークエンスになっていくが、さてカミーユはどうするの？

◆本作のタイトル『軽蔑』はかなり厳しい言葉（形容詞）だから、愛する妻からもろに「あなたを軽蔑するわ」と言われれば、それはきつい。脚本家であるポールがプロデューサーであるジェレミーからの脚本書き直しの依頼を引き受ければ大金が入るから、その仕事は決して悪いものではない。しかし、ドイツ人監督ラングが目指す映画の芸術性と、プロデューサーのジェレミーが目指す映画の商業性（収益性）とは大きく矛盾しているようだ。

ポールもそれを分かっているから、内心悩んでいたのだが、目の前でジェレミーが妻のカミーユを誘惑する姿を見せつけられると・・・。もっとも、ポールの方もジェレミーの忠実な美人秘書のフランチェスカ・ヴァニーニ（ジョルジア・モール）の魅力に惹かれているようだから、アレレ、アレレ・・・。

◆『オデュッセイア』は古代ギリシャの叙事詩「オデュッセイア」に基づく映画だが、あなたは「トロイの木馬」の物語を知ってる？また、英雄オデュッセウス（英語読みではユリシーズ）が「トロイの木馬」で勝利を収めたにもかかわらず、すぐに妻のペネロペの元に帰らず、10年間もの冒険旅行（遍歴）を続けた理由を知っている。

それはオデュッセウスとペネロペとの夫婦仲に何らかの問題があったためだが、ひょっとしてポールとカミーユとの夫婦仲にも、それと同じような何らかの問題が？それが『軽蔑』と題された本作のテーマだが、やっぱりゴダール監督の映画は難解・・・。

◆本作後半の舞台は、映画『オデュッセイア』のロケ地である、エーゲ海のナポリ湾とカプリ島に。その景色の美しさには息を呑むが、ポール、カミーユ夫妻が宿泊するジェレミーの別荘も素晴らしい。とりわけ、長い階段を昇降していく展望台（？）は素晴らしい。共にロケ地に赴いたものの、夫との仲が復活しないまま一人裸になって海で泳いだり、展望台の上で一人裸になって日光浴をするカミーユの姿は魅力的だが、なぜカミーユは急にポールを軽蔑するようになってしまったの？

2023（令和5）年11月29日記